

64. ヒスタミン (H) による免疫反応の抑制

鈴木盛一, 雨宮 浩
(国立循環器病センター)

マウス脾細胞の H receptor (H⁺) リンパ球 (Ly) の作用を検討した。PHA, LPS 反応が H 10⁻⁸~10⁻⁹M で抑制され, この抑制は H 2 receptor の agonist で拮抗された。反応抑制は, affinity column で H⁺ Ly を除くと消失した。Nu/Nu マウスの Ly は H で抑制されないが, 同系 +/+マウスの T細胞を加えると抑制されるようになった。また, Ly を H と24時間培養すると抑制性T細胞が誘導できた。

65. 食道癌表層進展例の検討

本島悌司, 鍋谷欣市, 花岡健夫
小野沢君夫, 滝川弘志, 李 思元
新井裕二 (杏林大・第2外科)

昭和48年以来, 杏林大学第2外科では原発性食道癌136例経験し, 108例に切除術を行なった。予後は1生率59%, 3生率28%, 5生率18%であった。

表層型食道癌例を供覧し, 食道癌表層進展例の検討を行なった。径2cm以下の不整形の症例と全周性に進展した症例も深達度はmであり粘膜筋板m, mに達していなかった。半周以下の進展例にもかかわらず, すでに粘膜筋板に達していた例もみられ, また早期に境界明瞭な潰瘍形成のみられた症例もあった。さらに表層拡大進展を示した例はmp.に達した病巣をほぼ中心として同心円状に深達度が浅くなり最外周にはDysplasiaもみられた食道全周にわたって約8cm長に病巣がみられていた。

われわれは, 術前非照射例より食道癌のなまの姿を検討し表層進展, 壁内進展の検索を行なっている。

66. 北里大学における腎移植の現況 (VI)

渡部浩二, 柏木 登
(北里大・臓器移植)

1980年12月現在, 移植総数は141例, 生体腎122, 死体腎19例。生着率はそれぞれ57, 16%, 生存率は, それぞれ82, 79%。最近2年間の生着率は, 86, 20%, 生存率は96, 90%, 抗免疫剤 Bredinin は, 早期の拒絶反応防止に有効。また輸血量を移植6カ月間に2000ml以上投与例は良好。移植前後の抗体とくに抗Bwarm抗体は, 移植腎廃絶と相関する傾向を示した。Total lymphoid Irradiation と骨髄移植による移植トレランス誘導の基

礎実験について述べた。

67. 胸部食道癌切除術後10年生存例に対する考察

木下祐宏, 羽生富士夫, 小林誠一郎
遠藤光夫, 浜野恭一, 鈴木博孝
山田明義, 鈴木 茂, 中村光司
(東京女子医大・消化器病センター)

我々の経験した胸部食道癌切除術後10年生存例は, 1946年以降1964年迄の531例中50例, 1965年以降1970年迄の252例中34例で, 計84例であった。これら症例の術前検査所見, 手術時所見と病理学的検索の結果, 更に術後10年以上経過した患者の状態等を検討し報告した。

これら胸部食道癌の手術成績は, 1964年以前に比較し, 1965年以降で手術死亡率7.4%から5.1%に改善され, 遠隔成績で10年生存率9.4%が13.4%と向上していた。

68. 頸部食道癌における再建とくに腸管遊離移植の再評価

遠藤光夫, 羽生富士夫, 小林誠一郎
木下祐宏, 浜野恭一, 鈴木博孝
山田明義, 鈴木 茂, 中村光司
(東京女子医大・消化器病センター外科)

下咽頭頸部食道癌の切除後の再建に, micro vascular surgeryによる腸管遊離移植の経験例をのべ, 再建法の適応として, 下咽頭頸部食道に局限している癌には侵襲の少ない点で遊離腸管移植を, 頸胸境界部近くまで浸潤の及ぶものには, 食道抜去法, 咽頭胃吻合を, ということを述べた。

69. 心臓外科20年

田宮達男, 西沢 直, 北川 素
(国立千葉)

昭和35年より55年11月末までの自家心臓手術症例は1211例で, 開心術960例, 非開心術251例の手術死亡率は夫々5.4%, 2.4%である。比較的早期より少量充填体外循環に積極的に取り組んだことが私共の特徴をなす。昭和49年以降手術成績は安定し, 重症の特殊疾患以外の手術死亡は稀となり, 人工弁置換術も手術, 遠隔成績共に著しく向上した。後者は人工弁, 抗凝固療法の進歩, 心筋保護法の導入による所が大きい。